

概 要 報 告

実施期日	7月29日(火) 【午後】
部会名	小学校 特別活動部会

テーマ 『異年齢交流を行う集団活動の活性化のための学級活動での取り組み』

提案概要

<実践に向けての課題意識>

異年齢集団活動を「心を育てる」ための取り組みの一つとしてとらえ、様々な活動を年間計画に位置づけて実施している。その一つに「たてわりグループ活動」がある。これは、17名～18名程度の全学年の児童で構成したグループで、6月～2月の間に7回の活動を行うものである。

4年生の児童にとって、たてわりグループ内での立ち位置のとり方は難しい。低・高学年という分類では上学年の仲間に入るものの、同時に高学年の中では一番下の学年となる。異年齢集団活動において高学年に期待されるのは、リーダーシップを発揮することや、思いやりの心をもって下学年の子どもたちに接することである。しかし、4年生の児童をただ参加させるだけだと、リーダーでもない、世話をされる側でもない中途半端の存在になりがちで、何をすればいいのかわからないまま時間を過ごしてしまい、ともすれば「たてわりグループ活動はつまらない」ということにもなりかねない。

そこで、子どもたちが目的意識をもって「たてわり活動」に参加できるように、4年生で学年として学級活動や学年活動を行うことにした。今までの振り返りを行うことからスタートし、6年生がリーダーとして活躍する姿に注目し、インタビューをしたり、リーダー会議に参加したりし、どうやったらリーダーを助けることになるのかを考え、実際に行動し、その集大成として全校集会に臨んだ。その後、活動の締めくくりとして学年集会を行った。

<実践の概要>

- ①これまでのたてわりグループ活動への関わり方を振り返ろう（学年集会→アンケート→実態把握）
- ②リーダーに密着！インタビューをしよう
- ③自分たちの力でたてわりグループ活動を盛り上げよう（下学年への積極的な声かけ、グループ活動内でのリーダーの動きを注視→アンケート→4年生の児童間での共有）

<成果と課題>

○学級活動での取り組み

→たてわりグループ活動に目的意識をもって参加する態度が育成され、さらに児童会活動における異年齢集団による自治的な実践活動を活発にすることにもつながった。

○話し合い活動の充実

→活動の振り返りの場面での話し合い活動を充実させたことで、学級内やたてわりグループ内で望ましい人間関係を築こうとする態度が育成された。

◇指導と評価の一体化

→活動の過程において、一人ひとりの児童の評価と共に集団の発達や変容についても評価し、指導の工夫改善につなげることの検証については今後の課題として残っている。

質疑概要

Q：「カッコイイ上級生になろう」というテーマについて、カタカナになっているが何か意図はあるか。

A：テーマは指導者側が提示した。子どもたちの中でこれまでのたてわり活動で5・6年生にあこがれを持っていたので、この言葉を使った。カタカナの「カッコイイ」については子どもたちに印象づけるために使った。

Q：「ミドルリーダー」という言葉をどのようにとらえて使っていたのか。

A：リーダーではないけれどもリーダーに近づいて行く存在として使っていた。

Q：4年生学年全体で行ったのか。

A：4年生学年全体で行った。

Q：学級活動年間指導計画の9月から11月の間で行っているが、学級会・クラスでの話し合いを行ったのか？

A：学級会・クラスで行った。たてわり活動の前に活動に向けての意識づけ、活動後に振り返りを行った。

Q：指導案は作成したのか？

A：指導案を作成して学級活動を行ったが、今回は学級ではなくて学年で動いていたので指導案は提案資料には載せていない。

Q：振り返りカードで「出来たこと」よりも「出来なかったこと」が多く、意外であったとあるが、こちらが期待していたことやずれはどのようなことがあったのか？

A：こちらは「出来たこと」の記述が多いと期待していたが、予想していたよりも「出来なかったこと」の記述が多かったのでショックであり、意外であった。それは、それだけ子どもたちの中で意識や理想が高まっていると学年間で分析した。

研究協議概要

6グループに分かれ、提示した協議の柱を中心に、各学校の実践や意見を出し合った。提案者は、各グループをまわり、質問に答えたり、話し合いに参加したりした。グループ協議後、グループごとに協議の内容を全体に発表した。

協議の柱①：異年齢集団による活動の効果的な展開について

○3、4年生合同の遠足で一緒にお弁当を食べたり、遊んだりしている。

○各クラス間での音読の発表を低学年に向けて行っている。

○4年生でもやってみようという活動が狭まると良い。(2年生に向けて等)

○評価の部分でアンケートを書かせると書ける子だけの評価になってしまいがちで難しい。

○クラス数や時間数、学校ごとに1年単位で取り組めることが大切である。

○学年を越えて学校全体で取り組めると他学年への意識が高まる。

○集会を通しての異年齢交流や協力せざるを得ない場面をつくる。(運動会で4年生が3年生に踊りを教える等)

○課題として、4年生の目的意識がありすぎて6年生を軽視してしまうことがないのか。意識しないで楽しめる方法や2学年ずつ活動したらできること、単発のものを多くし、年間を通して行うなどできると良い。

協議の柱②：特別活動における言語活動の充実

○クラスで話し合うと強い子やいつも決まった子が話すので、対策を行っている。書かせてから集め、一言コメントをしてから返し、次への発言、活動の後押しをしている。

○全体として話し合うと話せない子が出るので、お楽しみ会の中でプログラムの内容を各グループで話し合っ提案をさせ、話し合いに参加してリーダーシップを発揮できるような取り組みをしている。

○ただ単に振り返りを書かせるのではなく、活動の中で話し合わなければならない場面を作る。(活動が終わった後に、下の学年が上の学年に「ありがとう」を伝えるなど、次へつなげる活動。)

まとめ概要

○発達段階に合った課題・活動の中で子どもたちが自ら課題を見つけ、上級生から学ぶことで解決しようとしていた。

○今後の課題は話し合い活動の充実である。子どもたちの「あんな6年生になってみたい」という気持ちを、話し合い活動を通して膨らませ、具体的な取り組み内容まで子どもたちの力で決めて実践できれば、さらに充実した取り組みになるのではないかと。

○4年生の児童が目的意識を持って児童会活動に参加できていた。

○兄弟関係の活動であれば双方で役割分担をし、自己価値観や自己有用感をどうもたせられたのか。それが課題解決の糸口になったのではないかと。

○活動が始まる前に学年として、児童の振り返りから立ち上げたC(check)A(action)P(plan)D(do)から入ったことが、全ての活動で自然に行われている。CとAを活動の前に徹底的に行ったことが成功の鍵ではないかと。その後のPの展開で児童にも具体的に取り組むべき方法が明確になった。